

鶴見和子著

『Social Change and the Individual: Japan before and after Defeat in World War II
(社会変動と個人－第二次世界大戦における敗北の前と後の日本)』

(プリンストン大学出版会、1970年) より、

VI The Circle: A Writing Group among the Textile Workersの翻訳

第6章

サークル：ある繊維工業労働者ライティング・グループ

第1節 サークルの内発的起源

サークルとは、教育とレクリエーション活動のために組織された、小さく、自発的で、非公式な集団である。サークル運動は、鶴見俊輔によって「普遍的な原理（価値観、観念、動作、そして人と人との結びつき）を、日本の特殊条件の中から生み出すことを自らの課題とした思想運動」であると定義されている^(注1)。サークル運動の出現は、サンフランシスコ平和条約が締結され、連合国軍による軍事占領が終結した1951年以降である。サークル集団は、独自のグループか、あるいは労働組合や青年団、PTAなどのような大きな公的組織の下位集団として組織された。彼らの活動は、歌や踊り、演劇、写真、映画の製作と批評、登山、読書、討論会、執筆活動など多岐に渡った。しかもこれらの活動を2つ以上組み合わせて行っている集団もあった。しかしながら、本論文は研究対象を、執筆活動を行うライティング・グループ【訳注：鶴見和子は、「生活綴り方」をLife-Compositionと、「生活記録」をLife-Recordと英語訳している。Writing Group, Writing Circleはここでは、生活綴り方、生活記録をふくむが、さらに広く同人雑誌グループ、サークルの範囲にも及ぶと思われるため、カタカナ表記を採用した。】に限定する。他の方法よりも、彼ら自身の作品集から、彼らの自己変革の過程を追跡するほうが容易だからである。ライティング・サークルは非公式性や匿名性が高いため、現在

日本全土にどれだけのライティング・サークルが存在するのか、その正確な数字を概算することは大変難しい。日本大学附属図書館の一人の司書が1965年6月に行った調査によると、同図書館は、1500のライティング・サークルのガリ版刷り冊子を、約6000部所蔵している^(注2)。

大人の間で行われた自己再教育のためのライティング・サークルは、まず担任教師の無着成恭が編集した、山村の中学生たちの文集に刺激され広まっていった。その『山びこ学校』は1951年に出版され、後に全国的なベストセラーとなった^(注3)。この作品は、1918年に始まった「生活綴方運動 “life-composition” movement」と呼ばれる、日本独自の教育改革運動を引き継いだものであった。『山びこ学校』に描かれた教育の方法と内容の内発的性格は、とりわけ連合国軍による日本の軍事占領末期に注目を集めた。

日高六郎は、このような関心の原因は、軍国主義とファシズムから、平和主義と民主主義へという、敗戦後すぐに起こった日本社会全体の価値指向の変化にあると考えている。民主主義は、理論上は自主性を基盤にするものであるが、実際には占領軍から日本人へと強制的に押し付けられたのであった。多くの人たちは民主主義的価値は自分たちが苦勞して手に入れたものではなく、他から与えられた理想だとみなしていたので、彼らにとっては、価値の変化の内容と、変化させられた方法との間の矛盾は、覆いがたいものに思えたのであった。例えば、多くの学校教師たちにとって、アメリカから直輸入

された新しい教育の内容と方法を、日本の状況に適用することは非常に難しかった。だからこそ、再社会化の内発的方法とその内容の模索は、まず学校教師によって始められたのである^(注4)。『山びこ学校』は、このような模索から生まれた傑出した作品のひとつである。『山びこ学校』は、戦後の成人の社会化様式にも特筆すべき影響を与えた。

ライティング・サークルは、彼らのグループとしての構成と社会化の内容と方法について、戦前からあった2つの大きな日本独自の社会化つまり教育の様式から遺産を引き継いでいた。ひとつは、徳川時代の村落共同体に共通してあった若者組・娘組と呼ばれる伝統的な社会化機関であり、もうひとつは、戦前の学校教師の集団によって始められ、戦後世代の学校教師たちが進展させた生活綴方運動である。

徳川時代、武士の子息たちは藩校で、平民の子供たちは寺子屋で教育を受けていた。前者の学校では、通常は武士の子息のみが占めることになる行政的地位につくために必要な知識を習得することを主な目的としていた。後者の学校では、庶民の子供たちに必要とされる読み、書き、そろばんといった実用的な技能を重要視していた。「組」は、学校とは異なる同輩集団である^(注5)。組において、およそ15～30才までの青少年は、村の共同体における成人役割について教えられた。そこで彼らが習ったのは次のようなことである。村の歴史、村にある家々の家系、祝祭儀礼と舞踊、職業的技術と能力、男女交際の慣例、性知識、年長者へ対する礼儀、などであった。若衆組と娘組は、別々の建物で暮らした。組の教育の大部分は、両グループ共同で行われた。青年たちは、夜になると娘宿を訪れ、夜なべをしながら語り合うのであった。たとえば男性はわらじを編み、女性は縫い物をした。このような集いは、男女が互いのことを知り、配偶者を選ぶ機会を作った。一組の男女が結婚をすると決めたら、それぞれのグループは、両親よりも前にその縁組を承認し、その利点についても議論した。仮に両親がその結婚に反対であっても、グループからの圧力に逆らってまで反対することはめったになかった。

組の仲間は、「藩」つまり封土からも、中央政府である「幕府」の権力からも独立していた。しかし彼らは、配偶者を選ぶという特定の問題を除いては、村の共同体や第一次集団つまり家族から完全に独立していたわけではなかった。成人役割は村落共同体の伝統によって定義されており、組の仲間は村の伝統的規範に従うよう義務づけられていた。しかしながら、それらの教育は村の年長者によるのではなく、青少年自身の手によって行われていた。このような限られた意味においてはああるが、組という社会化様式は村落共同体の権威から自立していた。若者組と娘組の両者はともに、おおむね日露戦争（1904－1905）の終わりまで存続していた。その後は、国家統制機関である青年団が、若者の社会化を代行した^(注6)。

戦後のライティング・サークルは、かつての伝統的な同輩集団による社会化様式からいくつかの側面を引き継いだ。第一には、何をおいても成人役割を学ぶことである。第二には、学びかたの方法という点において、国家からも村落共同体からも、第一次集団すなわち家族からも自立していることである。第三には、学ぶこととレクリエーションを結びつけたことである。そして第四に、グループのメンバー間において、喜びや興奮を共有すると同時に最大限に活用するという、前向きで情動的な社会化を重視することである。

生活綴方運動は、極度に非理性的で依存的な集団主義であり、しかも強制的な天皇制イデオロギーを鼓舞するために教育が国によって統制されていた時代にあって、理性的で自立的な集団主義であって、自発的な考えや行動の仕方を発展させようと努力していた学校教師たちによって行われた教育の方法である。最初の試みは小学校教師であった芦田恵之助（1873-1951）によって行われた。彼は、文部省が定めているカリキュラムにあらかじめ記されている、型にはまった画一化された主題を教師が生徒に与える課題主義、文型主義に対して、子供たちが自分で書きたい主題を見つける随意選題を奨励した。1913年に出版された著書である『綴り方教授』において、彼は主題の選択と表現の自由を

基盤にした綴方は、子供の個性と自発性を発展させる優れた手段であると強調している^(注7)。1919年【訳注：1918年が正しい】、児童文学雑誌『赤い鳥』が、小説家であり児童文学作家でもある鈴木三重吉(1882-1936)によって創刊された。鈴木はこの雑誌に、子供たちから作文や詩を募集し、コラム欄を設けて自ら論評した。鈴木は、子供たちが日々の生活における経験を写実的に鮮明に記述することを奨励した。この雑誌は1929年に休刊したが、1931年に再刊し、最終的には鈴木が死を迎える1936年まで発刊され続けた^(注8)。

戦前の生活綴方運動の指導者であった峰地光重は、生活綴方運動の発展において、鈴木三重吉には二つの功績があったと考えていた。一つは、鈴木と彼の雑誌が、国から支給される公式の教科書から学ぶことよりも、事実の観察と自分の経験から学ぶという姿勢を子供たちに奨励したことである。二つには、鈴木が、庶民の日常の言葉である方言を、表現の正当な手段として認めていたことである^(注9)。後者については注目を要する。すでに私たちはこれまでの章で、学校と軍隊における二つの戦前の社会化、つまり教育が、一字一句間違えずに勅語を暗唱することに重きを置いたことに触れている。勅語は儀礼的言語の最たるものである。教科書や文学の文体は、さまざまな儀礼語によって書かれ、表現されていた。文部省があらかじめ定めているカリキュラムに従って、作文の練習をするときに、児童はこれらの儀礼的な言葉の手本を写すことを強制された。

こういった教育体制に反対する立場から、芦田恵之助と鈴木三重吉は、教師と子供たちが共にもっていた儀礼的な言葉への盲目的崇拝を壊し、その代わりに庶民の日常の言葉を尊重する新しい姿勢を打ち立てた。私たちはすでに前章【訳注：原本の第5章】において、思想、感情、行動の観念的パターンを表現する手段としての儀礼的言語と、現実的なパターンを表現する手段としての日常語を対比させた。芦田と鈴木が指導した生活綴方の方法の主な功績は、まず地方語を適切な表現法として教育に導入したことであり、子どもたちの暮らしや感じたこ

と、考えたことやしたことを自分の言葉でそのまま書けばよいと主張したことである。生活と思想の間の、観念的な型と現実的な型の矛盾を認識するという生活綴方教育の独自の問題は、戦後の教師たちの課題として残された。

芦田恵之助と鈴木三重吉は、お互いの交流はなかったが、芦田は子どもたちの表現の自由は尊重しなければならないという考えを広め、鈴木はその考えを一般読者へと広めた^(注10)。両者は、さらにいえば、大正(1912-1926)デモクラシーの代表者であった。この時期は、軍国主義やナショナリズムに基礎を置く国家統制された教育に対抗するヒューマニズムとデモクラシーの教育が短命ながらもいくつか発展していた。この時期には、軍国主義とナショナリズムに基づいた国家統制された教育に抵抗し、人間的かつ民主主義的な教育の形を発展させるために、多様で短命な試みが行われた^(注11)。このように、芦田と鈴木の業績は、生活綴方運動の初期に位置づけられる^(注12)。

生活綴方運動の第二期は、1929年ごろ三つの雑誌の発刊によって始められた。様々な地方の教師が集って東京で出版した『綴り方生活』、日本の北東部に位置する秋田県で出版された『北方教育』、そして日本中央部の鳥取県で出版された『国語人』である。

この生活綴方運動の第二期には、特筆すべき三つの特徴がある。第一に、主な活動家は全国に散在していた初等および中等教育の教師たちであった。東北地方、北海道・北方地方、鳥取県の教師グループがとりわけ強力であった。そして東京都内の教師グループは、自分たちの考えを地方の教師たちに押し付けるのではなく、地方にある自立的グループの交流センターとして活動した。生活綴方運動は、これらそれぞれの地方に根ざした地域グループと、彼らから表出される考えの多様性、そして中央集権がないといったところが、日本の近代化の始まりとともに起こっていた他の新しい知的運動と一線を画していた。実際に、それまでの新しい知的運動といわれるものは、いつも東京大学あるいは外国の大学で教育された知的エリートのグループによって始められ、その中央組織が他の地方

の市町村へ自分たちの考えを広めていた。第二期の生活綴方運動は、いくつかの地方から同時に発生し、しかも大学卒ではない人達によって指導された最初の知的運動であった^(注13)。東京を含む、いくつかの地方グループの相互関係や、それぞれのグループの中の個人の関係は、すぐれて平等主義的であり自立尊重的で自発的で、しかも開放的であった。生活綴方運動のこれらの特徴は、たいへん階層的で依存的で強制的で、しかも隠蔽主義的な天皇制の構造とは違っていたのである。

生活綴方運動の第二の特徴は、グループを組織する教師たちが、すでに確立された特定の合理的な思考方法に頼るのではなく、往々にして非合理的な人間関係や、思考や行動の様式にとらわれて生きている児童たちに対して、より理性的な思考を育成させようとしたことである。

1927年の金融危機や1929年の世界恐慌の衝撃を受け、日本の東北部の稲作の村々は、凶作によって極度の貧困に襲われ、とりわけ1927年から1934年の間苦しんだ。普段でも、これらの地方は日本の他の地域と比べ、最も近代化の度合いが低く貧窮していた。これらの村の教師たちは、国定教科書の内容が農村の子供たちの実情からかけ離れていることに気がついた。たとえば、国定教科書を無理やりに用いた修身教育を受けた子供たちは、畳を敷いた床の上に正座し、うやうやしくお辞儀をし、彼らの両親に礼儀正しく「おはようございます」とあいさつをすることを教わる。学校でこのように教えられる子供たちは、実際には畳のしかれていない板敷きの床の上で、礼儀正しいあいさつをして親をびっくりさせるに至る。親たちは、そのような挨拶の仕方にふさわしい社会環境には、かつて一度も暮らしたことがなかったので、子供たちの礼儀正しい挨拶は、まるで自分たちの貧窮生活を蔑んだものであるかのように感じるのであった^(注14)。教師たちは、『赤い鳥』の編集者である鈴木三重吉が子供たちの生活状況の向上よりも、子供たちの文体の向上のほうに関心を抱いていると考えていたので、鈴木が主張していたような綴方の方法に不満を持っていた^(注15)。そして教師たちは、共産党の知的エリートたちが

主張する教条主義的マルクス主義もまた、遠隔地にある村で日ごと行う授業にふさわしいとは思わなかった^(注16)。このような状況ゆえに教師たちは、非合理的環境の真っ只中で生活している多数の児童たちに、合理的な考え方や行動を育てようという目的に沿った独創的な方法を見出すことができたのであった。

教師たちが、彼ら独自の授業経験から構築した方法論に「調べる綴り方」と呼ばれるものがある。国分一太郎が主張したように、この方法論は、子供たちが自分自身で日常生活の問題を明確にさせ、事実を調べ、その原因と解決策を分析し、問題が個人的な性格のものであっても、教師や仲間とお互いに協力して問題解決への答えを見出すことを重視していた^(注17)。このような取り組みは、子どもたちに合理的な態度を培わせた。なぜなら現実の問題を解決するための目的と方法がともに経験的であり、そしてまた直面している問題を解決するために提案されたいくつかの方法の妥当性を検証することが促されていたからである。こういったやり方は、自立のかつ集団的な態度を子どもたちの間に育てさせた。学級の一人一人は自分で考えると同時に問題解決のために協力することを求められたからである。

生活綴方の第二期における第三の注目すべき特徴は、「文集」と呼ばれるガリ版刷りの作文集をつくるという慣習が成立したことである。通常文集は児童の協力を得られた担任教師によってつくられた。個々の文集はそれぞれ独自のタイトルを持ち、月刊、季刊、年2回、あるいはそれぞれの教師の目標に応じて、定期に刊行された。文集にはいろいろな役割があった。文集は、綴方の授業において子どもたちに読まれ、議論される手作りの非公式な教科書として使われた。教育が表向きは教師から生徒への一方的な押し付け教育に基づいていた時代にあって、文集は教師と生徒の相互の交流と、生徒同士の交流を促し、そこで学級の連帯感を強めた。文集は同じ学校の教師同士だけでなく、他の地域の遠くの学校の教師の手にも渡っていった。教師たちにとって唯一の公式な伝達経路は、国家統制された教育の政策決定を行う文部

省からの一方的な通達のみであった時代にあつて、教師たちは文集の交換を通して非公式な彼ら独自の交流網を築き、連帯感を強めていた。1936年に出版された教育雑誌によれば、その年におよそ112の文集が教師の間で回覧されていた^(注18)。

第2期の生活綴方運動は、国家統制された公式な教育に抵抗する教師たちによる、自主的で非公式な教育運動であった。それは天皇制特有の構造から逸脱した、教育の内容においても方法においてもユニークな運動であった。1937年の日中戦争勃発後、生活綴方運動の推進者であった教師たちは、徐々に職場から追放されていった。1940年には、約300人の教師が逮捕され、投獄され、獄中死する者もいた^(注19)。

表31 文集の分布

地 域	文集の数
北海道	10
東北地方	20
関東地方	25
中部地方	14
近畿地方	17
中国地方	15
四国地方	1
九州地方	5
韓国	3
満州	1
中国(上海の日本人学校)	1
合 計	112

出典：鶴見俊輔『日本のプラグマティズム』、p.99。今井・峰地『作文教育』pp.142-144も参照のこと。

生活綴方運動の第三期は、山形県山元村の中学生43人と、担任であった無着成恭によって始められた。戦前の遺産である、「組」による社会化形式つまり教育と、生活綴方の方法論の両者を受け継ぎ、それを発展させたものである。無着成恭の方法は、生徒たちに彼らの生活経験を日常の言葉で綴らせ、そこに表れる現実の問題について議論させ、合理的で自発的、そして

自立的であると同時に集団的な考え方を育成する限りでは後者に似ていた。しかし、無着はそこにとどまらず、その綴方と討論の方法によって、小作農家の息子、娘である生徒たちの現在の役割と、成人後に村の共同体においてとるべき未来の役割を定義しなおすことを目指した。彼の方法は、将来村の共同体において果たすべき役割を学ぶことを重視する点では、組が行う社会化形式に類似していたが、伝統的に規定されていたこれらの役割を単に受け入れるのではなく、定義しなおすことを主張した点が違っていた。無着成恭は、子どもたちが自分たちの新しい役割を模索するうえでの不安を解決する情報交換所となるように学級を組織したのである^(注20)。

敗戦後、公立中学校の教育政策に全面転換があった。戦時中、中学校の校長は、入学式に際して生徒たちに次のような訓示を垂れるのが常であった。「中学校とは、国のため、そして天皇陛下のために、名誉ある戦死をとげる方法を学ぶ場所である」^(注21)。これとは対照的に、1951年の山元中学校の卒業生総代であった佐藤藤三郎は、次のように述べた。「私たちが中学校で習ったことは、人間の生命というものは、すばらしく大事なものだということでした。そしてそのすばらしく大事な生命も、生きて行く態度をまちがえば、さっぱりねうちのないものだということをなつたのです」^(注22)。戦後教育の理想は、子供たちに、最悪の事態つまり自分たちの死にたいして備える訓練をするのではなく、よりよく生きたいという望みを説くことであった。師範学校にいた間に、無着成恭は社会の構造における理想と現実との間にあるさまざまな矛盾に気づいた。彼は、生徒たちに自分たちの現実の生活経験を書かせ、教科書に描かれている理想の生活と比べるように仕向けた。そして学級における討論を、現実と理想のギャップのあいだに架かる橋となるようなやり方で、農民としての役割を定義しなおす方向へと持っていった。

無着成恭の方法の特徴は、生徒のひとり江口江一が抱えた問題の対処によく現れている。

江一が中学二年生の時に、寡婦であった彼の母親は、江一とその弟と妹、74歳になる江一の

祖母を残して亡くなった。彼の家は、4分の3エーカーのタバコ畑しか持っていなかった。長男である江一は、家族を扶養するべく、畑仕事をし、タバコの葉を干して圧し、それを売って家族に必要な食料を買うという責任を、一人で負わなければならなかった。担任教師に指導されて、江一が農作業の日程表をつくってみると、彼は自分が中学校を卒業することは重要なことであると考えているにもかかわらず、学校に出席する時間はほとんどないことが分かった。江一は、4分の3エーカーの土地から得られる収入に生活保護の給付金を加えても、母が借金を積み上げたのと同じく、彼も収入内でやりくりするのは不可能であることを発見した。彼の母は必死に働き、その重荷にも静かに耐え、そして死んだ。しかし江一は、戦後の新憲法によれば、すべての日本人は健康で幸福な生活をおくる権利を持っていることを学校で学んでいた。彼は農民の新しい役割を学び、生活を改善するべく働くために、中等教育を終えることを望んだ。江一は、家族を扶養するフルタイムの農夫としての役割と、義務教育を終えるべき生徒としての役割という二重役割を演じていた。

江一は、農作業のスケジュールと、家の生活費の正確な数字を記すことで、彼の生活の苦しい立場を表現している。無着成恭は、江一の綴方を学級で紹介し、級友たちはそのことについて討論した後に、江一が登校できるよう、放課後や週末に彼の仕事を手伝うことを決めた。担任である無着自身も、その計画に参加するために江一の村へと引っ越した^(注23)。役割の葛藤に直面した江一のような生徒が、ほかの級友たちの助けによって少なくとも一時的に楽になる。そのことを通して、こんどは彼ら自身が、そうなった場合に取りうるる対処の仕方があることを学んでいった。

負の情動が支配的であった環境において、部分的にはあるが、主に正の情動による社会化を打ち出したため、無着の教育が生徒に及ぼした影響は持続したのであった。こうして製作された43人の子どもの文集である『山びこ学校』には、彼ら農家の困窮の様子が描かれている。教室を離れれば、子供たちは悲嘆や不安、

羞恥心に屈してしまっていたかもしれない。しかし、教室での討論において彼らは、一人の子供の悲嘆と不安が、他の生徒たちにも共有され、彼らが江一にしたように、他者の重荷を引き受けるように奨励されていた。喜びや興奮もまた、学級の全ての仲間のあいだで共有され、とりわけ、修学旅行の時にはみんなで旅行へ行けるようにとクラス全員で働き、お金をためた^(注24)。苦しいときも楽しいときも、無着成恭は、心の通い合いと経験の共有を力説した。彼の社会化の方法は、まず第一に「完全コミュニケーション」のモデルに基づいていた。

戦後の大人のための綴方サークルは、このような生徒たちの社会化形式、すなわち伝統的な「組」の社会化の型と、生活綴方の方法論の融合体を受け継いでいた。これからわれわれは、紡績工場における女性従業員の集団によって構成されたライティング・サークルについてみてゆく。

第2節 紡績工場におけるライティング・サークル：農家の娘としての役割と工場労働者としての役割の統合に向けて

製造業全体における繊維工業の生産高が占める割合をパーセンテージで表すと、戦前（1934年～1936年）の平均値32.8%から、1960年には12.3%へと低下している^(注25)。

しかし繊維工業における女性労働者の割合は、他の製造業に比べて依然として高いままである。ほとんどの紡績工場において彼女たちは、全体の労働力の80%かそれ以上を担っている^(注26)。1951年に労働省が行った調査によれば、これらの繊維工業女性労働者の66.9%が農家の出身であった^(注27)【訳注：1950年当時は自称、他称ともに紡績女子工員すなわち女工と呼ばれていたが、ここでは直訳して繊維工業女性労働者とした】。同調査は、彼女たちの平均年齢が19.6歳であり、平均就業期間が2年3ヶ月であることを示している^(注28)。彼女たちの約80%が工場に隣接した寮で生活している^(注29)。彼女らの多くは、工場で働くために、義務教育を終えた直後に故郷の農村を離れていた。そして一定期間働いたあと、多くは故郷の村へ戻って、農

家に嫁ぐのであった。このような繊維工業女性労働者の一般的な移動パターンによって、彼女たちは農村と都市の生活をつなぐ役割を潜在的に担っていた。彼女たちは、農民と工場労働者の価値、規範、行動を統合するという重要な役割を担っていたのである。

ここでは労働参加という視点から、工場での生活が農村出身の労働者に及ぼした衝撃についてみてゆく(注30)。大人の社会化の過程にも似た、農村出身労働者の労働参加の過程には、農村生活と工場生活のあいだで食い違う2セットの価値観、規範、考え方、目に見える所作の相互関連という問題が含まれる。

労働者のなかには、労働者になる以前にすでに村の共同体において習得した価値、規範、考え方、目に見える所作を身につけた大人として工場に来ることもあり、またそういったものを身につけていない若者として来る者もいた。おそらく、労働者たちのほとんどは、すでに村における生活様式を身につけていたと思われる。彼らが労働に参加する過程は、本論文ですでに図式化したような、人格変容の分類によって記述することができるであろう(本論文の第一章、三節を見よ)。したがって、私たちは人格変容の6つのタイプを、労働参加の過程という観点から再定義しよう。

ここでは、ある人物が人生の始まりの時期においてV(村落共同体に特有の価値、規範、考え方、目に見える所作というセット)にコミットし、彼は後になり、I(産業システムに特有の価値、規範、考え、目に見える所作というセット)にさらされると仮定しよう。そこでは、労働コミットの類型は、以下のようにまとめることができる。

「永久コミット型(Ever Committed)」:

永久コミット型の人間は、Iには属さず、少なくともVのどれかにあたる。彼は、産業システムから見れば非コミット型である。

「逆転コミット型(Reversely Committed)」:

逆転コミット型の人間は、Vの諸要素を捨てて、少なくともIのある部分と置き換えている。産業システムから見れば、少なくとも彼

が工場にいる間は、完全コミット型である。

「逸脱型(Deviant)」:

逸脱型の人間は、VにもIにもコミットしない。産業システムから見れば、彼は全面的非コミット型であり、「完全な逸脱者」と呼ばれるだろう。

「多層構造的自我(Many-Layered Self)」:

多層構造的自我型の人間は、Vのいくつかの要素を保持したまま、Iのある部分を身につけ、それらが寄せ集まっている。産業システムからみれば彼は半コミット型であり、したがって「日和見主義者」だとみなされる。

「矛盾対決的自我(Conflicting Self)」:

矛盾対決的自我型は、少なくともVのいくつかの要素を保持しているが、同時にIにも引き込まれ、VとIが自身の中で葛藤を起こしていることを自覚している。産業システムから見れば、彼は半コミット型で、優柔不断である。

「革新者型(Innovator)」:

革新者型は、彼が選んだ目標に関連づけてVとIを選び分け、少なくともVとIを新しいパターンを創造するために統合する。産業システムから見れば、彼は全面的なコミット型である。彼は、産業システムそのものにも、そしてまた村落共同体システムに対しても、何らかの変化を引き起こすことが可能である。

ここでは約5千人の労働者を雇用する羊毛紡織会社が所有する4つの工場のうち、大阪の近く

【訳注:実際には四日市市の東亜紡織泊工場の例である】に位置するある工場に勤務する労働者たちによってつくられた生活綴方サークルを取り上げる。生活綴方サークルには約50人のメンバーがおり、主に女性である。これらの繊維工業女性労働者たちは、4つの社会化機関—家族・経営者・労働組合・サークル—の影響を受けている。我々はこの4つの機関のうち、先の3つがどのような影響を従業員に与えるのか考察していく。

戦前期の繊維工業女性労働者たちは、一般的に、少なくとも2つの集団の成員—家族と職場—であった。戦後になってはじめて、労働組合という別の集団との関係が加わった。これら3

つの主要な集団は社会化機関として機能し、それぞれが、集団のメンバーに対して特別な役割を与えた。組合の傘下に入っている女子工員は、少なくとも3つの役割を演じなければならなかった。つまり娘であり、労働者であり、そして労働組合員であった。我々はまず始めに、これら3つの役割規定に何が含まれているのか明らかにしたい。

家族：農家の両親との関係における娘としての役割（繊維工業女性労働者にとっての農村生活の核心について）

1870年代に紡績工場が設立されて以来、女性労働力は歴史的に「家計補充労働」と見なされてきた。1930年代に出版された、山田盛太郎と平野義太郎の古典的研究によれば、「小作農家の高い農地使用料と、【訳者追記：その小作農家の息子、娘である】工場労働者の半隷属的な低賃金との間には悪循環がある」という^(注31)。1878年時点における地租改正によれば、一反につき収穫の30%を農地税として政府に支払い、38%は小作料として地主に支払うことが求められ、小作農家の手元にはたった32%しか残らない^(注32)。1890年代には、農家の45.1%が平均して約1エーカーを耕作する小作農家であり、それゆえ日本の農業人口のおおむね半数が約1.2エーカーの土地から、およそ30%の収穫物で生活している。当時の著名な評論家であった横井時敬は、次のように論評している。「たった1エーカーしか耕作していない小作農家は、もはや農家ではない。・・・1エーカーの土地からでは、明らかに5人家族が食べていくことは不可能だ」^(注33)。【訳注：ここでの横井時敬の文章は平野義太郎『日本資本主義社会の機構：史的過程よりの究明』から引用されている。鶴見和子による省略部分を復活させると、原典では以下のようになる。「彼ノ所謂五反百姓ナリシモノ、凡テ、一二農業ニ頼リテ、其ノ生計ヲ営ミ得ザルコト亦、明ケシ。此等ノ小民ハ實ニ、雇役、運搬、或ハ漁、或ハ樵、若クハ、商工ノ業ヲ兼ネテ、始メテ、其ノ一家五口ヲ養ヒ得ルモノナリ。」】

戦前の繊維工業女性労働者は、主にこのような小規模な小作農家から斡旋されてきた。彼女たちは、両親の家計の不足を補うため、故郷へ仕送りするよう望まれていた。このような状況が、「女性労働者は自立ではなく家計を補うことを期待されている」という言い訳を経営者に与えたため、彼女たちの給料は最低生活保障賃金にとどめられていた。彼女たちからすれば、最低生活保障賃金しかもらえないことが、仕事に全面的にコミットさせることを不可能にしていた。ほとんどの小作農家が耕地所有者になった1946年【訳注：一般的には1947年ごろ】の農地改革後でさえも、戦前の家計補充労働者というパターンは女性労働者の間に存続していた。1952年になっても紡績女性労働者の90%が、月々の給料（20.60\$）の平均30%を田舎への仕送りに充てていた。これらの女性の41.5%は、彼女たちが家計補充のために働いていることを自覚しており、29.5%は結婚資金のために働いていると述べた。そして自立するために働いていると明言したのは、たった13.1%であった^(注34)。

農家の娘という役割において、女性労働者たちは経済的に充分自立することは期待されていなかった。彼女たちの賃金は、彼女たちのものではなく、家計収入の全体に含まれる一部分であるとみなされていた^(注35)。このような、個人の貢献を判別しにくい家計の概念は、農業生産の様式に由来している。その様式とは、個々人がどれほど働いたかをあいまいにしたまま、家族の構成員がひとつのユニットとして働くといったものだった。土地は家のものであるため、個々人の労働の成果は、結果として家長によって代表される家全体のものとなる。

家計補充労働者という観点は、農業の生産様式に由来しているが、より普遍的には「恩義（principle of *on*）」や「恩返し（repayment of *on*）」にも関連している。「恩義」に照らすと、娘は両親に対して誕生や養育といった「恩」があり、両親に対しての果てしない「恩」に報いるよう期待される。両親が望むだけ賃金を仕送りすることは、農家の娘として定められた役割の根幹を成している。

このような状況では、両親－娘の関係性は、

主に非合理的で、排他的、機能的には拡散しており、親密で、依存的な集団主義、階級的、強制的、秘密的、搾取的であった。

会社：経営者との関係における従業員としての役割
(繊維工業女性労働者の工場生活の一端)

繊維工業の始まりから、経営者は日本特有の父権的温情主義に基づく労働方針の創案者であり、その忠実な信奉者であった。その一つが、寮のシステムである。寮では、15人から20人の女子に対して20畳の部屋があてがわれていた。女性労働者たちは、彼女たちの諸経費を毎日記録し、裁縫や料理、その他の家事のコツや技術を教えてくれる母親代わりとしての寮母のもとにおかれた。そして会社の経営者たちは父親代わりであった。若い女性たちは、外出の制限を受け、しっかりと働くようプレッシャーを受け、経営者が設定した製品の基準を満たせなければ罰を与えられた時々、暴力を加えられることもあり、「親心」の名においてそれが正当化された。寮のどの部屋でも、新参者は年上のルームメイトを「お姉さん」と呼ぶように教えられ、工場の副監督でもある「お姉さん」もいた。このように、経営者は女性労働者たちに擬似家族関係をおしつけ、彼女たちは彼らに一日中監視され続けた。また、女性労働者の故郷に駐在し、工場への就職を斡旋する「おじさん」と呼ばれる連絡員の男たちがいた。彼らは仕送りや伝言を少女たちから両親へと届けていた。このような人間パイプラインを通して、女性労働者たちは両親からの遠隔操作を受け続けていたのである(注36)。

戦後、労働者を保護するための法律が成立した。例えば、1947年に制定された労働基準法は、次のように謳っている。「雇用者は、寮に居住する労働者の私的生活に関する自由を妨げてはならない」。寮の自治を促進するため、同法は次のことも明文化している。「雇用者は、寮自治会議長および室長を含むいかなる寮の役員の選出をも妨げてはならない」。同法によれば、労働者は規律ある寮生活を維持するために必要とされる規則の発案や改正に参加すべきで

あるとされた(注37)。このように、理論上では寮のシステムは民主化され、労働者の寮生活における自治とプライバシー概念が打ち立てられた。しかし実際には、さまざまな方法によって経営者は労働者の寮生活を制限していた(注38)。

寮のシステムや繊維工業における会社と従業員との間の擬似家族制度の持続は、経営者が女子工員に対するとときの全ての態度と関連している。経営者は、彼女たちが工場に長く勤務することを望んではいなかった。ある紡績工場長は、経営者のこのような視点を次のように述べている。

「実際紡績の状態は今では相当機械の方も完全になっておりますし、また女工さん自身が本当に自分の技術によってやらなければならぬというような仕事もわりに少ないのです。それで実際に働きうる力というのは、紡績で考えますれば3年位をこえる人は相当能率のよい腕になっておりまして、勤続平均5年位の女工が最も能率のよいところとなり、それから上になってくると、またちょっとカーブして下ってくるのです。これは本当の結婚適齢期になった娘さんたちの気分の問題ですかどういいう問題か知りませんが、要するに最も働きいいというのは14歳から入りまして17、8歳位までです。ですから紡績会社としましては、真に技術を要する男工以外はそう長くつとめてもらいたいということを望まないのです。4、5年おっていただければ充分なんです」(注39)。

経営者は、男性労働者には終身雇用を望むが、女性労働者に対しては、一生産業システムにコミットすることを望んではいないのである。経営者は、彼女たちに献身的な従業員になることを望むが、それは義務教育を修了してから結婚するまでという限られた期間だけなのである。彼女たちには、短期間の献身とともに、勤勉で効率的かつ従順な労働者であることが期待された。擬似家族関係と、寮の学校における実際的な家事技術の習得の重視は、このような経営者の方針に基づいて強化されていった。

戦後の経営者と労働者の関係は、強制性や秘密主義、搾取などがある程度残ってはいたが、

理念上は合理的になり、普遍的で、機能的にはそれぞれ専門化され、回避的で、独立した個人重視であり、しかも階級的であった。現在の労働管理においては、理論上は少なくとも自発性や透明性、互酬性がある程度重要視される。しかしながら、擬似家族関係が部分的にはあるが持続していたために、紡績工場における実際の経営者と労働者の関係性は大きい特定人選的で、機能的に拡散しており、親密で、依存的集団主義的で、強制的、秘密主義的で、搾取的な傾向が未だに存在している。

労働組合：組合指導者との関係における一般組合員の役割（繊維工業女性労働者の工場生活の一端）

繊維工業には主要な労働組合の2つの大きな連盟がある。ひとつは全織同盟であり、1960年には44万2千人の労働者を抱えており、その64%は女性である。もうひとつは、繊維労連であり、同時点で3万2千人の組合員のうち、80%が女性である^(注40)。全織同盟は主に綿や羊毛を扱う労働者を含み、繊維労連は絹を扱う労働者で構成されている。前者は日本における労働運動のなかでは右翼に位置する全労会議に加入している。後者は中立労連に加入している。ここで我々が研究対象とする労働者の団体は全織同盟である。

紡績工場における労働者の大半が女性であるが、組合の役員に選出される女性は非常に少ない。1951年に労働省の婦人少年局によってなされた調査によれば、25の工場の85%の組合員が女性であるが、女性の組合役員はたった16%しかいなかった。男性組合員は5人のうち一人は役員に選出されるが、それに比べて女性組合員は43人のうち1人しか選出されていなかった^(注41)。女性の組合運動への参加は、このように相対的に低いままである。このような偏りには、様々な理由がある。第1に、彼女たちの多くが（経営者に制限されていることもあり）、長期雇用を約束された労働者ではなく短期労働者であるために、組合活動が重視するような長期雇用者のための労働環境改善への取り組みについて積

極的な興味を示しにくいのである。第2には、大部分の男性組合指導者が、一般組合員の日常語からかけ離れた「儀礼的言語」である、紋切り型の「組合用語（jargon）」を多用するため、女性労働者とのコミュニケーションを難しくしていることである。第3には、一般に女性が労働組合の活動に参加することや、とりわけ公衆の面前で話しをすることは、彼女たちにとって烙印を押されることになるからである。筆者は紡績工場の調査を行っているとき、従業員たちに、工場で開かれる集會に男性が1人でも参加していると、なぜ女性がめったに発言しないのかと質問したことがある。彼女たちは、もし公衆の面前で発言すれば「女らしくない」と思われ、紡績工場の圧倒的大多数が女性であるために、ただでさえ少ない結婚の機会を、それによって失うのではないかと恐れている、と答えてくれた。

労働組合は、理念的には男女を問わない全ての組合員が、産業体制にたいし長期間十分にコミットすることを望んでいる。組合員の役割とは、一人前の、自立した労働者としての彼や彼女の権利と義務を自覚することである。家計補充労働者がそのような態度を持つことは難しく、そのために彼女たちは組合活動に関心が薄く、役員の選出や決議の投票といった行動を求められたとき、組合の指導者に盲従してしまうのである。

労働組合における一般組合員と指導者との関係は、合理的、普遍的、機能的に明確で、自立のかつ集団主義的で親密であり、階層的、自発的、透明性があり、互惠的であることが理想とされる。しかしながら、現実には上に述べたような困難があるため、女性の一般組合員と組合指導者との関係は、特殊で、依存的個人主義的、強制的、秘密主義的かつ搾取的であるということが多い。

サークル：女性労働者という役割と、農家の嫁や母親役割を再定義するために

ここまでは、戦後期における繊維工業女性労働者の一般的な状況を説明した。この女性労働

者たちの状況は大阪に近い都市にある約1000人規模の毛織物工場でも同様であった。この工場ではおよそ15人の女性と3人の男性による綴方のサークルが立ち上げられた。若い娘たちの多くは、長野県にある伊那谷沿いの村から、中学を卒業後すぐにこの工場へ働きに出ていた。1950年前後に学校を終えた彼女たちは、2つの異なるイデオロギーにさらされていた。つまり戦中の国民学校教育では軍国主義を吹き込まれ、そして戦後の中学校では民主主義の理念を教え込まれていた。そうして彼女たちが工場に入ったとき、そこでは先述のような工場の経営陣や労働組合、そして彼女たちの両親から、相反するような要求にさらされることとなった。それらの複雑な要求とどのように向き合い、また彼女たちが中学校で教わったことと工場の現場で直面していた現実との食い違いにどのように対処すべきかが、彼女たちにとって大きな問題となっていた。

最初の頃は、労働組合の運営委員を務めていた澤井余志郎のもと、女性労働者たちは自由時間に合唱や談笑、読書や交換日記を行うグループとして集っていた。そのサークルは労働組合の下部組織として位置づけられていた。そして『山びこ学校』が出版された1951年、澤井はサークルのメンバーにこの本を推薦した。彼女たちは自分たちの家のありようが『山びこ学校』における子どもたちのものと通じていることを見出し、また子どもたちが自らの置かれた境遇をなんとか改善しようとする努力に感銘を受けた。こうして娘たちは自分たちの家族や村のことを、子どもたちの作文のように、簡潔かつ率直に書いた。21編の作品が集められ、ガリ版印刷で作られた最初の文集は『私の家』と名づけられた。ここで綴られた共通のテーマは、村の家族への送金が求められることについてであった。2エーカーに満たない土地で7人の家族と暮らし、義務教育を終えてすぐに工場に入った田中美智子は、このように書いている。

「妹は、四月からの私の送金によってまかないながら高校へ進学した。私は本当は送金するのがいやだった。自分の買いたい本も買

えずにいるのに、家の犠牲になって誰が送金などするものかと思っていた。けれど正月の帰省でこの決心はくつがえされた。あいかわらずの古だたみ、改造するはずの台所もそのまま、破れた上に張り紙をしたからかみに、予想外の貧しさを知らされ、送金の約束をしたのだった。妹はとても気兼ねをしているようだったので、心配せずに学校のニュースを知らせてくれと便りをやると、その返事に、『私が学校のことを書くと姉さんの気持ちが乱れるから絶対に書いてはいけないとしかられたから、以後便りを書くにも書くことがなく、しぜん便りの回数が少なくなるでしょう。』と書いてきた。

私は妹がもっとのびのびと農村にとって必要な次のようなことを勉強してくれるのを望むのである。」【訳注：引用文における「次のようなこと」について、原文では次のように続く。「農家の人一家そろって朝暗いうちから夜の星が出るまでくたくたになって働いても、満足に食べることもできない生活しかできないのは何が原因であるか。そして不合理な生活を改善しようとしぬ主婦たちのあきらめ的な感情は何処から生まれるのであるか。農家の税金がべらぼうに高いのは何故か。又農村の次男坊は何処へ行ったらよいのか。そして村の若者たちが農業なんかバカらしいと放り出さないでみんな百姓をよろこんで働ける村にするにはどうしたらよいのか。その教育方法は…など。」】^(注42)。

志賀はるみは父親を戦争で亡くし、母親と弟は0.84エーカーの水田と0.84エーカーの畑で農業を営む。彼女もまた、自分の稼ぎを送金することの不本意な気持ちを表現している。

「うまやも家の中にあるし、天井はひくく黒く、柱はすこし西に傾いている。大きく仕切った炉でたく煙は障子も唐紙もふすぐれさせてしまう。無雑作につった神棚は真黒でお札の字なぞみえない赤いダルマが黒いダルマになっている。【訳注：引用文の原文ではさらに「仏壇、これもふすぐれて位牌の字はほ

とんどよみとれない。年に一度おぼんのときだけは位牌のほこりを払って外に出す。このときようやくすかしてみえるのに天保という字がある。」とある】ずいぶん古い百姓屋らしい。

三月頃だったか家を直したと書いてあったが、少しはきれいになったのかと思ったら四月に帰ったときちょっとがっかりした。前の縁側をほんの少し直しただけだった。

『これでも二千元かかったんだ。』
と母がさも大変だったというようにいった。私はその時財布をはたいて二千元だけおいてきた。この間も手紙に蔵を直すので金がうんとかかるから送ってくれと書いてきた。私ばかりあてにしてとしゃくにさわった。事実はそうでないのだろうけれど。

私は手紙に私だって自分の生活があると書いて出してしまった。生活って何？ 私は自分も周囲の人のことをくわしく書いて出したこともないのに。

誰だってよい家に住みたい、美しいものを着たい、おいしいものを食べたいと思うのはあたりまえだと思う。だからこそそうなるために努力するのだし又努力しなければならないと思う。」^(注43)

戦前には、娘たちの賃金は彼女たちのものではなく、親のものであると当然のように考えられていた。しかしこの娘たちは、戦後に教育を受け、個々人は自分の収入を得る権利といった「基本的人権」を学んだゆえに、貧しい農民の親を賃労働で支える義務があるという、伝統的に培われてきた農村の娘としての役割規範というものに、黙って従うことは難しかったのである。さらに、彼女らの労働組合による最低賃金の定義によれば、家に送金をしなくても、どれだけの稼ぎがあっても生計は成り立たないとされていた。労働組合による賃上げ要求によると、家への送金は手当てに含まれていないのである。組合のメンバーとして、彼女たちは理想としては自分たちが親から独立しており、また親もそうであると考えた。しかしながら、現実には農家の一員として、彼女たちは自分の親が貧しく、彼女たちの支えが必要であることが分

かっている。サークルでの綴方とディスカッションを通して、彼女たちは自分の家だけがそのような貧しいのではなく、他のほとんどの娘たちの家もまた貧しいことを認識しあい、それゆえに送金をめぐる問題は彼女たちにとって共通の問題となっていたのである。そこで彼女たちは、農民の困窮という問題が労働組合のメンバーとしての理想的なありかたと、農家の娘としての現実的な役割との間の葛藤をつくりだしていることを実感したのである。

彼女たちはそのほとんどが最終的には農民の嫁として村に戻ることも知っていた。彼女たちは農家の嫁や母としての役割を再定義することが、貧しい農村の問題に対処する実際的な方法ではないかと感じた。そのような再定義をするために、彼女たちが考えたことは、伝統的な役割というものが何なのかを具体的に知る必要があるということだった。そしてそのことを知る最も有効な手段は、自分の母親について学ぶことであった。そうして彼女たちは自分たちの母親についての伝記を書くことにした。41編の伝記が集まり、二つ目の文集として1953年3月に『わたしのお母さん』が完成した。サークルのメンバーの何人かはその後まもなく、近代中国や韓国の歴史における母親の役割についての重要な視点を捉えた歴史家の石母田正の文章を読んだ。石母田はまた自身の仕事や思想においては、「近代的思想」の持ち主であり「進歩的」で「自己中心的」だった彼の父親と対比させる形で、「封建的」であり自己犠牲の精神を持っていた母親による深い影響があったことを認めている。そしてこのように結論づける。「息子たちの行動や事業はいつでも母たちの犠牲となげきによってささえられている」^(注44)。この当時、歴史家によって書かれたこのような文章に感銘を受けたことから、サークルのリーダーであった澤井は、彼女らの農村の母親たちの自伝が、市井の日本女性の基礎資料の一部となりうるのではと提案した。このとき約90人の女性と2、3人の男性が参加した。すでに書かれていた伝記は、休暇で家に帰ったときに行った母への聞き取りや、手紙でのやりとりなどをふまえて、書き加えられ手直しされていた。こうし

て3番目の文集が『母の歴史』として同年の暮れに完成した^(注45)。

鈴木久子は、当時53歳になる母親についてこのように書いている。

「小学校三年の頃から学校にも行かれず、製糸工場で働き、安い賃金の全額を親にわたし、こづかいだけもらっていた。そして、十七歳の時に肋膜炎になり、寝ついてしまった。当然過労から出たのだろう。こんなにまでして働いたが医者にもてらう金もなく、天理教(民間宗教)の信者になり、助ったという。それから、又工場で働き、年がきたので父と結婚したのだが、婚礼の日まで父の顔も知らなかったという。嫁に来た家も貧乏で、姑さんは村で知られた働き者で、気の強い人だった。体の弱い、農業も知らない母は、どんなに苦しんだことか、泣きたくも泣く場所がなかったという。

母に叱られて、わたしが布団の中で泣いていた時、こんなことをいった。

『泣けるうちはまだいい。女というものは嫁にいくと泣くところもない。寝どこの中で泣けばすぐ見つかるし、便所で泣けば、おばあさんが、長い便所だというし、泣き顔で出てくれば、それこそ、おばあさんたちの茶飲み話になる。一年に一回、里にかえって親の前で泣けば、おまえがみじくだからと叱られてしまう。泣けるうちはいい。』

母に強い姑様も私たちにはとっても良いおばあさんだった。母と同じように苦しい生活を七十二年間送った。【訳注：鶴見和子は、原文の数行をここで省略している】

『会社の人のいうことは何でも気持よく聞いてな。良い子になって、認められる人間になってな。』

と母にいわれ、私もおとなしく黙って働く子が良い子なんだと思い込んで入社した。入社してその年の盆(7月)、組合では一時金を要求した。会社は“出さない”といていたが、何度か交渉をもってやっと一時金が出された。このときなにかちがったことを知った。

『会社は金がないが給料だけは出してやる。』

といわれ、

『ハイ、ありがとうございます。』

といったら一時金もでなかったということ、

“会社は私たちが要求しなければ、利益があったとしても何も出さない”

ということを知った^(注46)。

こうしてサークル内で母の伝記が読まれ、比較されていくことにより、母親の人生には共通のテーマがあることが明確になっていった。母親たちは多かれ少なかれ不幸せな境遇であった。そして不幸の原因は農業の生産や流通の構造、また戦争によって夫や息子を一時的、あるいは永遠に奪われたこと、そして夫が生きていようとなかろうと義理の家族と共に生きていかねばならない大家族制度にあるとされた。そして若い少女の観点からみてもっとも重大なことは、伝統的な家族制度によると、母親たちの結婚は、配偶者との恋愛に基づくものではなく、両親たちのお膳立てによって決められていったことだった。グループにおいてある娘が指摘したことは、すべての母親は自分の家のためによく働き、自己を犠牲にしているけれども、彼女たちは他所の家にはたいしては極度に競争的であり、家の外で他人とお互いの境遇の改善のために協力しようとはしないことであった。伝統的な村の規範に足並みをそろえることで、母親たちは収穫がよければ重労働が報われ、従順であれば保護されると信じていた。母親たちは、宿命と彼女たちが呼ぶものを選ぶしかなく、そして自分の娘たちにも、目上の者に従い、その境遇を受け入れるように教え込んでいったのである。娘たちは哀れな母親たちに同情し、またそのような苦境においても粘り強く生きてきたことに多大な尊敬の念を覚えた。しかし両親や義理の家族や夫への絶対的服従の姿勢が彼女らの不幸をもたらしただけで、娘たちは目上の者に対する盲目的で服従的な態度を取らないようにすることを試みようとした。彼女の母親たちのそうしたあきらめの態度が貧乏を生み続けてきたのであるから、娘たちはそのような状況にどのように立ち向かうかを模索しはじめた。

若い娘たちは、母親よりも“幸せな母”とな

るための現実的な最初のステップは、相互理解と愛情に支えられた連れ合いを見つけることだと結論づけた。3組の幸運な恋人たちがサークルから誕生した。しかしながら、この一見幸運な結果が、サークルにとって大きな障害になった。サークルには結婚相手としてふさわしい若い男性が、リーダーの澤井余志郎を除いて3人しかいなかった。それぞれの男性は3、4人の女性から好意を寄せられていたのだが、彼女たちは、その男性が特定の女性と交際することを知ると当然ながら失意を味わうこととなる。リーダーの澤井は、ハンサムで知的で、博識で心優しく、理解力があつた——彼は若い女性のあこがれる特質を兼ね備えていた。個人的であれ集団であれ、どのような性質の難事が生じて、娘たちは彼に相談をもちかけ、彼は常にグループでの話し合いの場でそれらの問題を取り上げた。澤井にあこがれるサークルの娘たちは多かったにもかかわらず、彼は誰とも一緒にすることはなく、その代わり、全員と良き親友として接した。娘たちに対する澤井のこうした態度はサークルにおける安定要因となり、「相手をつかまえる」ことに成功した娘たちに対する嫉妬や反感が生じるような危機的な時期においてはとりわけ重要であった。大多数の娘たちは、3組の恋人たちはお互いに熱中するあまり、グループ全体に対する責任をおざなりにしているとして彼らを非難した。そのことについて澤井を交えて話し合った際、彼は恋人たちを責めるのではなく祝福するよう提案した。「僕らは常に喜びも苦しみも分かち合おうとしてきた」と彼は言う。「その点から言って、もしグループのなかで2人の人間が恋に落ちたら、それを祝ってあげるのがふさわしいのではないか？」。娘たちは澤井の論が正しいと認めた。

娘たちはカップルを祝福するための最良の方法は何かを話し合い、彼女らが「こけし贈り（木彫りの人形の民芸品であるこけしの一組を贈呈する）」と呼ぶ新しい儀式を考案した。近くの山へのピクニック遠足を企画し、25人のメンバーが集まった。彼らは焚き火で米を炊きマグロの缶詰やご飯を食べ、そして合唱をした。歌うのを休んでいるとき、ひとりの娘が話し始

めた。「みんな知っているように、私たちのなかまの中にも三組の恋愛があります。この三組の人たちを今日はみんなで祝福してあげたいと思います」。3つの箱が用意され、彼女は続けてこう述べた。「今日はこの人たちにおくりものをしようと思うのです。これはみんなで話しあう機会がなくて私たち5～6人で相談したのですが、こけしを一組ずつおくり、男の人は女のこけし、女の人は男のこけしをもっていただきたいんです。よく見える所へおいて、それを見るたびに、なかまのことを思い出し、みんなの中の恋愛というものを育てていってください」^{（注47）}。

やがてサークルは近所のほかの工場に勤める男子従業員たちとの交流も広げ始めた。彼らはピクニックに出かけ、歌い、読書をし、綴方を共に書いた。これらの共同活動のなかから最終的には婚約に至る恋人たちがでてきた。グループは、彼女たちにとって求めていた結婚のありかたを示すような結婚パーティーの儀式を執り行っていた。

特筆すべきことは、こけし人形の例のような新しい祝祭の催しが、グループの前向きな感情——特に喜びと興奮の共有と向上——を強め、後ろ向きな感情——すなわち、嫉妬や悲嘆といったものを低減させていたことである。伝統的な村における同輩集団の社交においては、祝祭への参加は成人役割を習得する重要な機会とされてきたが、娘たちのサークルはそのような伝統的な強調点を引き継ぎつつも、その祝祭の中身や様式を変容させていったのである。

そこにはサークル活動の参加と、各種労働組合の活動への参加との相互関係が見られる。あるとき組合の幹部による不正事件が明るみになり、その幹部への不信任案が提出された。しかしながら、会議において不信任投票の要求は通らなかった。サークルのメンバーの一人がその事態について会議で意見を述べ、なぜ組合幹部への批判がもみ消されてきたのか疑問を呈した。彼女はそれを日記に書いたが、いつものことのように、工員宿舎の舎監が見回りのときにその日記を読んだ。その舎監は娘を戒め、「あなたの考えはよくないから、わたしが直し

てあげる」と言った。娘はこう答えた。「わたしは、わたしの考えに対して、自分で責任をもってますから、なおしていただく必要はありません」^(注48)。かつての女性労働者は監督者やその背後にある経営陣を恐れ、そのような圧力に簡単に屈していた。自分で考えていくことの権利に支えられた恐怖心の克服は、サークル活動によって培われた新しい態度であり、メンバー個人における自立した判断力がそこでは重要なものとなっていた。

1953年の9月、全織同盟は、左派の労働組合である総評(日本労働組合総評議会。労働組合の中央組織のこと)からの脱退を提案した。サークルのあった紡織工場の組合でも脱退をめぐる二つの派に分かれた。組合大会が開かれ、方針を決める話し合いがもたれた際、公認の代議員は、現場監督の妨害によって会議に出席することができなかった。しかし何人かの代議員の女性労働者たちはオブザーバーとして会議に出席し、このように抗議した。

「私は代議員会において推せんされ、職場の方も責任者より出席しようと思うなら出席してもよいといわれていたのです。そのとき、責任者は『お前もう結婚したのだから、組合のことに深入りしない方がいいぞ』といいました。私としても、職場は大事ですからできることなら離れたくないと思います。けれども、今度の大会には自分達の正しい考えをのべるために出なくてはならないと考えたのです。それなのに、私は代議員として出られなかったのです。当日になっても代議員証は渡されませんでした。私はそれでもと思い、昨日の朝ここへ来ました。代議員証はくれず私の坐る場所ありませんでした。そして大会代議員の顔ぶれをみると、代議員会で決定された人々とちがう人がいるのです…これが民主的な労働組合のあり方でしょうか?」^(注49)。

しかし何も実行はされなかった。

翌年、専制的な経営者による非人間的な処遇に対して近江絹糸の従業員がストライキを執行し、それを全織同盟が支援を行ったとき、泊工

場のサークルのメンバーたちはピケを張るスト参加者の先導的な役割を果たした^(注50)。このようにサークルのメンバーたちは全織同盟の主張が労働者の観点からみて正しいと思うときは、全織同盟への忠誠を示した。しかし彼女らは盲目的に従っていったわけではない。

サークルの娘たちが労働組合活動へ積極的に参加してゆくにつれ、彼女たちの労働参加の姿勢も変化するにいたった。1954年に澤井氏が会社から解雇され^(注51)、それまでは各持ち場に分散していたサークルのメンバーたちは、他の従業員から隔離されるような特別な持ち場に集められた。経営者側が驚いたことに、サークルのメンバーたちは他の従業員よりも生産量を上げた。他の持ち場の現場監督たちも、なぜ彼女たちの生産量が向上するのかを理解しはじめた。彼女たちが自ら説明しているように、単純に、分かり合える好きな友人たちとともに仕事をするほうが楽しいからなのであった^(注52)。

当時は景気が悪くなると、会社は生産量を縮小し、従業員を一時的に解雇するのが常であった。1958年の2月、サークルのメンバーを多数含む従業員たちが一時解雇となり、失業保険の申請をしなくてはならなかった。娘たちは、6ヶ月以内に再雇用してもらえる暗黙の約束を経営側から取り付けることに成功した(6ヶ月というのは失業保険の降りる期間の限度である)。彼女たちは郷里の村に戻っているあいだも、サークルの仲間との連帯意識を強めるべく、工場に残る友人たちと文通をつづけた。彼女たちは正確に6ヵ月後、再雇用された^(注53)。これまでは、繊維工業の女性労働者たちがいったん村に戻ると、彼女たちは同じ工場に戻る努力をしたためしかなかった。結婚するまで家にとどまるか、より小規模の工場へ職を求めるか、どちらかに甘んじてしまい、それはより低い賃金しか得られないということであった。サークルのメンバーたちはあくまでも工場へ戻るために粘り強い努力をし、労働参加をしなかった、あるいは参加が中途半端であった過去の紡績女性労働者たちと比べて、自分たちが完全参加型の労働者であることを証明してみせたのである。

1950年に彼女たちが工場へきてから、現在で

は約15年が経過している。彼女たちのほとんどはすでに工場を去って結婚しており、何人かは都市に住んでいるが、多くは伊那谷の村々に戻っている。工場を辞めるとき、彼女たちは5年ごとに集まることを互いに約束した。1965年の1月3日に最初の集いが伊那で行われ、34人の参加者（サークルのメンバー、彼女たちの夫や子ども）があった。そこで彼女達は結婚生活について談話したり、綴方を見せ合ったりした。そして彼女たちの話題の中心は、工場時代に彼女たちが再定義した理想的母親役割と、実際に彼女たちが現在こなしている農家の嫁や母親役割とが、どの程度一致するか、しないかということであった。彼女たちは理想像どおりに生活することはできないけれども、彼女たちが築いてきた家庭と、彼女の親たちが築いてきた家庭とのあいだには、非常に大きな違いがあると断言した。なぜなら日本でもっとも重要な祝日である正月において、農家の嫁がこのような会合に出るために家を空けるというのは、彼女たちの母親世代にとっては考えられないことであった。しかし多くのメンバーは集いに出るために苦しいやり繰りをしたのであった。彼女たちが自分の考え方を夫や義理の親に受け入れてもらうため、自分が「役に立つ人」であるということを家族に証明するべく、まずは必死に労働しなければならなかったことは彼女たちの多くが認める場所であった。日々の重労働によって、彼女たちはこの集まりに出る許可を得たのである。彼女たちは農業を営む女性として自分たちの母親世代もまた重労働に励み、彼女たちよりも働いたが、休日はなおさら、外出を許されなかったことを思い返していた。現在では、若い女性は外出するだけでなく、彼女の夫を同伴することもあり、そして何人かは集いのあとに、男性、女性にこだわらず、妻の友人たちを家に招くこともある。サークルのメンバーの一人はこう述べる。「正月に嫁の友達を家に招くなんて、昔の農家では非常に珍しかった。それにどんな理由であっても、嫁の男友達を家に招くなんて、ぜったいに不可能だった」^(注54)。こうした若い妻と夫の関係性は、圧倒的な上下関係があり、回避的で秘密主義、そして搾取的な関係

から、平等で、親密で、開放的で互恵的なものへと変容している。彼女たちの母親とはちがって、その多くは、たとえ厳密には恋愛から生じたと言えなかったとしても、相互の同意に基づく結婚をしていた。

サークルのメンバーの多くは、それぞれ村落共同体の若妻会に属している。その集まりにおいて彼女たちは書くことや読むこと、また議論の方法などを紹介していき、物質的生活や家族関係を若い嫁たちが協力して改善してゆくことを通して、伝統的な村の同輩集団をサークル活動というかたちへ変えていくことに挑戦している。何人かの女性はひきつづき近所の町で小規模の工場に働きに出ており、そこで良い賃金を保証する団体交渉に参加したり、組合の結成を試みたりしている。

村の生活と家族生活を通して、彼女たちは農民役割と産業労働者役割を集大成する人として、また同時に世代間交流の仲介者として自覚的に活動している。私たちは、彼女たちを労働参加を発展させる革新者として、また人格形成を通じた小規模な社会変動を担う革新者とみなすことができるであろう。

第3節 考察

繊維工業労働者のライティング・サークルが行った実験から、我々は仮説的ではあるが、いくつかの結論をみちびきだすことができるであろう。

役割の再定義において、情動はどういう位置を占めているだろうか。一人の女性労働者は次のように言った。

「私たちの母親たちは、一生懸命働き、運命に忍従することにも耐えていた。私たちは彼女たちから、がんばりすぎる性格と忍耐力を受け継ごうとしているが、それを、運命に打ちのめされるためではなく、よりよくするために使うのだ」^(注55)。

重労働と、自己犠牲の中で生きた農家の母親たちは、長期間にわたって、正のものであれ負

のものであれ、強い情動を注ぎ続けることができる能力を持っていることを示していた。この高度に強い情動こそ、彼女たちの娘が受け継ぎたいと願う財産なのである。自分たちは、母たちが保ち続けてきた高いレベルの感情的強さはそのままに、ただしそれを母たちとは異なる対象へ向けることができると娘たちは感じた。

以下は、ある娘と、戦争で夫を亡くした母親との会話である。

「秋まつりのとき『硫黄島の砂』の予告編をみたあとで母が、

『あーあ、いやだいやだ。』といったので、私は、

『おかあちゃんだってそう思うでしょう。だから、私が戦争はいやだっていう運動したっていいじゃない。』という、今度はすてばちに、
『そんなもの、戦争でもはじまって原子ばくだんでもどんどん落ちて、みんな死んじゃったらい。』というのです。こんなにもいためつけられてしまっている母なのです。」(注56)

この文章における、戦争に対する母親の態度はマックス・シェラー (Max Scheler) によってルサンチマン (ressentiment) として取り上げられた、歪められた負の情動の型を表している(注57)。母親は、死に対しては直接的で激しい正の情動を向け、生に対しては負の情動を向ける、という倒錯した主張をしている。このようなねじ曲げられた反応は、願いや希望をくじかれるという経験の積み重ねによって生まれたものである。対照的に娘は、労働組合やサークルが支援する反戦活動への参加によって、戦争に対する負の情動がたえず解き放たれていたため、ルサンチマンの犠牲にはならなかった。母親たちの負の情動の強さや持続性は娘たちに引き継がれた。しかし娘たちはそれらの方向を変え、シェラーが「本質価値 (authentic values)」と呼んだ、死ではなく、よりよい生のほうへとその情動を向けようとしたのだ。

伝統的な社会では、役割モデルが世代間に伝達される際には、一般に、情動の強さ、方向性、対象は一体化したまま保たれていた。しか

しながら急速に変化する社会では、情動の強さはもともとの方向性、対象からたやすく分離されてしまう。もし情動の何らかの特徴が伝えられるとしたら、おそらく情動の方向性や対象よりも、情動の強さのほうがいずれ伝えられやすいのだ。

情動の弱い母親の子供は、そのライフサイクルを通して、弱い密度の情動のまま、彼らの役割を演じることが多い。情動の強い母親の子供は、そのライフサイクルを通して、強い密度の情動で彼らの役割を演じがちになる。

ここで用いた資料は、母親の役割の伝達に関するもののみである。父親から息子への役割伝達における、父親の情動が占める位置について検証するまでは、完全に一般化することはできない。我々はまた、父親から息子への役割伝達における母親の情動の影響についても、母親から娘への役割伝達における父親の情動の影響についても、同様に検証すべきであろう。

繊維工業労働者のライティング・サークルについて我々が調査してきたことから、サークルというものの構造についての一般的概念を引き出すこともまたできるのではないだろうか。我々が調査してきたサークルは、一定の程度まで、農家とも会社とも似た構造を持っている。サークルは、農家や会社と同様に、機能的に拡散しており、親密性があり、集合主義という特徴を持っている。同時にサークルは、労働組合の理念的な構造と同様に、合理主義、普遍主義、独立性、集合主義、自立性、開放性および互酬性という特徴を共通に備えている。もちろん我々は、サークルの構造に関するここでの分析が、特定のサークルに基づいているという点で特殊であり、全てのサークルに適用できるわけではないことに留意しておかなければならない(注58)。

日本の研究者たちは、サークルの必要最低条件について、次のように認めている。サークルの規模は、全てのメンバーの間で対面的関係が築ける大きさであること。定義の上ではインフォーマルであること。メンバー同士の関係は、合理的、自発的、平等的で、そしてコミュニケーションにおいて開放的であること。ま

た、参加する、しないという判断基準が自発性にに基づくことである。これらの必要最低条件を除けば、サークルにはあらかじめ形づくられた構造は何もない。ひとつひとつのサークルは、その構造において互いに何かしら異なっている。それらの構造は徐々に発展していく。その発展の仕方は、サークル内での役割分担を配分するそのやり方と、サークル外でメンバーたちがもっている他の集団への所属の型に依存している。もちろん、個々のメンバーの特異性については言うまでもない。結社の自由が理念的に確立された社会においてのみ、異なる構造を持つサークルが増殖しうる。

社会化の機関として、サークルは本書前章で検証した軍隊とはきわめて対照的な位置にある。サークルは連带的であることが支配的であり、その構造は国家から独立しており、軍隊は敵対的であることが支配的であり、国家に依存している。サークルと軍隊に共通する要素とは、それらがともに家族と村落共同体という第一次集団にその構造をある程度依存していることである。中間集団としてのサークルは連帯性が強く、国家からの独立の度合いも強いいため、増殖してゆくなら多元的社会をもたらし手段として役立つであろう。一方、繊維工業労働者のライティング・サークルによって例証されたサークルの構造は、いくつかの点——例えば親密性、機能的拡散——において、第一次集団すなわち家族と類似しており、第一次集団から完全に独立しているとは言えない。この意味においては、我々が本章で記してきたようなサークルが増え広がるのならば、それらは多元的社会というよりさらに共同体的＝多元的社会の中間集団として役割を果たすことになるだろう。我々が述べてきたように、サークルが必要最低条件を満たすだけで成立するのであれば、サークルの構造は様々でありうる。したがって、強く連帯し、国家からも第一次集団からも独立したサークルが現れ、増加することは起こりうるであろう。ここでは国家から独立した、大人の再社会化に有効な機関として役割を果たす中間集団の出現を指摘するにとどめる。このような中間集団が出現する状況が、戦前の大人の社会

化形式と、戦後の大人の社会化形式とを区別するのである。

注記

《文中における引用文については、原則として引用された原資料にあたり、原文の日本語テキストから引用するようにつとめた。資料引用に際して鶴見和子により要約的に、あるいは説明をくわえた英訳が行われている場合には、翻訳の注にその旨を記した。》

- (1) 鶴見俊輔「報告—大衆の思想：生活綴り方、サークル運動」、久野収ほか編著『戦後日本の思想』、東京、中央公論社、1959年、p.112。
- (2) 松浦辰寿「サークル史の整理中間報告」、『思想の科学』、1965年6月、p. 85。それらの小冊子や本は、思想の科学社のメンバーたちによって集められ、1956年から月ごとにサークルの小冊子の批評が、最初は『中央公論』、後に『思想の科学』に掲載された。
- (3) 無着成恭編『山びこ学校』、東京、青銅社、1951年。最も新しい版は東京の百合出版から1957年に出版された。本論ではこの最新版を使う。英訳ではEchoes from a Mountain Schoolというタイトルがつけられている。木村道子訳、東京、研究社、1954年。
- (4) 日高六郎「生活記録運動」、『講座・生活綴り方』、東京、百合出版、1963年、第5巻、pp.285-287を参照。
- (5) 若者組、娘組の詳しい説明については、柳田國男「明治大正史世相篇」、『柳田國男集』、東京、筑摩書房、1963年、第24巻、pp.295-299；同著者「婚姻の話」、同書、1963年、第15巻、pp.43-53；中山太郎『日本若者史』、東京、日文社、1958年。子供組は農民の子どもだけでなく、武士の子どもをあいだにも見られる。勝田守一ほか『日本の学校』、東京、岩波書店、1964年、pp. 40-44を参照。
- (6) 勝田、前掲書、p.45；長野県下伊那青年団史編纂委員会編『下伊那青年運動史』、東京、国土社、1960年、p.16を参照。

- (7) 今井誉次郎・峰地光重『作文教育：学習指導の歩み』、東京、東洋館出版、1957年、pp.26-33；芦田恵之助『恵雨自伝』、東京、開頭社、1950年；鶴見俊輔「日本のプラグマティズム—生活綴り方運動」、久野収・鶴見俊輔『現代日本の思想:その五つの渦』、東京、岩波書店、1956年、pp.72-115；「芦田恵之助年譜」、『国語教育』、No.31(1961年7月)、pp.179-184。
- (8) 鈴木三重吉の研究と刊行誌については、日本児童文学学会編『赤い鳥研究』、東京、小峰書店、1960年【訳注：正確には1965年】を参照。
- (9) 今井・峰地『作文教育』、pp.58-66。
- (10) 前掲書、p.29。
- (11) 1917年、私立学校である成城小学校は、沢柳政太郎により、東京に実験的な学校として創設された。彼は、子どもたちの創造的・批評的能力の発達を促進させる教育の支持者だった。学校では国定教科書の代わりに、それを使用する教師によって書かれた教科書が用いられた。それらの自家製教科書は、他の様々な学校に大きな衝撃を与えた。学校では、天長節や、紀元節などの国民の休日における式典は廃止された。類似した実験的な学校は、東京や日本各地に現れた。勝田ほか『日本の学校』、pp.205-218。
- (12) 鈴木三重吉は自分たちの活動を生活綴方運動と呼ぶ教師達を批判し、そこに加わらないでいた。そのことは否定できないが、しかしながら、『赤い鳥』と鈴木三重吉は後に生活綴方運動のリーダーとなる多くの教師達に影響を与えた。今井・峰地『作文教育』、pp.75-76。たとえば、後に運動のリーダーとなる鈴木道太は、彼が教えていた仙台北方の都市の学校でなされた鈴木三重吉の講義から強烈な印象を受けたことについて書いている。「私は大いに鼓舞された。綴方教育の目的が子どもたちに純文学を書かせることではなく、彼ら自身の生活から人間の記録を書かせることにあるという彼の主張には感銘を受けた」。菅忠道「赤い鳥の成立と発展」、日本児童文学学会編、『赤い鳥研究』、p.17。
- (13) それらの教師の多くは師範学校を卒業していた。異なったそれぞれの地域における運動の分布については前掲書、今井・峰地、pp.106-109を参照。
- (14) これは戦前の東北地区のある村の教師から著者が聞いたエピソードのうちのひとつである。
- (15) 今井・峰地『作文教育』、pp.83-84。
- (16) 小川太郎、国分一太郎ほか編著『生活綴方的教育方法』、東京、明治図書、1955年、p.91。
- (17) 国分一太郎「調べる綴り方への出発とその後」、1934年：この箇所については今井・峰地『作文教育』、p.113からの引用による。
- (18) 『教育—国語教育』、1936年2月の文集リストによれば112の標題がある。このリストを基にして、表31が作成された。
- (19) 国分一太郎編『石をもて追われるごとく』、東京、英宝社、1956年。これは、戦前期に生活綴方運動に参加した14人の教師の肅清、逮捕、投獄などの経験に関する手記集である。
- (20) ウィリアム・J・グード(William J. Goode)は、家族が大人と子どもの「役割割り当てセンター」であると述べている。彼はまた「家族はまた役割組織全体を見渡す視座ともなり…したがって、このセンターから、人は平衡のとれた役割系統の基本的手順を学ぶ」と書いている。*American Sociological Review*、25、No.4(Aug. 1960)、p.493における「役割緊張 role strain」を参照。家族が成員間のコミュニケーション不足、あるいは家族の誰かの長い不在などの理由でこのような機能を果たさないときに、サークルが家族に等しい機能を「役割割り当てセンター」のように果たすかどうかは本論の争点である。この点については家族についての次章を参照のこと。
- (21) 白鳥邦夫『無名の日本人』、東京、未来社、1961年、p.189。
- (22) 無着編『山びこ学校』、p.250。
- (23) 江口江一「母の死とその後」、前掲書、pp.14-29を参照。この作文は1955年に文部大臣賞を獲得した。

- (24) 江口サメ「杉皮背負い」、阿倍ミハル「旅行のことなど」、前掲書、pp.72-77、pp.103-107。
- (25) 大内兵衛ほか編著『日本経済図説』、東京、岩波書店、1965年、pp.80-81。
- (26) 労働省婦人少年局『婦人労働の実情』、東京、1961年、p.25を参照。日本紡績同業会の報告によると、日本の9つの主要な紡績企業の経営下にある工場の女性工員の比率は、1947年で86.2%となっている。政治経済研究所『婦人労働の基本問題—戦後紡織工場の実態調査』、東京、中央労働学園、1948年、p.1。
- (27) 労働省婦人少年局『綿紡績工場の女子労働者』、東京、1951年。嶋津千利世『女子労働者—戦後の綿紡績工場』、東京、岩波、1953年、p.172からの引用。
- (28) 前掲書、pp.176-177。
- (29) 政治経済研究所『婦人労働の基本問題』、p.2。
- (30) 労働参加の定義はWilbert E. Moore、Arnold S. Feldman編 *Labor Commitment and Social Change in Developing Areas*、New York、Social Science Research Council、1960年、pp.1-4を参照。
- (31) 平野義太郎『日本資本主義社会の機構：史的過程よりの究明』改訂版、東京、岩波書店、1959年、pp.95-96。
- (32) 前掲書、p.28。
- (33) 横井時敬「我農業の基礎復た撼揺せんとす」、『太陽』、第3巻2号、1897年、p.210：この箇所については前掲書、p.85からの引用による。
- (34) 塩田庄兵衛「全国繊維産業労働組合同盟」、大河内一男編『日本労働組合論：単位産別組合の性格と機能』、東京、有斐閣、1954年、pp.285-286。家計補充のシステムは紡績労働者に限られていたわけではなく、日本におけるすべての女性労働者を取り巻いていた。労働省婦人少年局によって1948年に行われた調査によれば、東京の様々な職種の女性労働者1705名の68.1%が家計を支えるために働いていると答えた。労働省婦人少年局『婦人と職業』、東京、1948年、p.11を参照。1948年に著者の行った調査によると、紡績や機械、通信、金融、化学、交通などの諸産業や公務員として働く350人の女性労働者の74.2%が家計補充労働者であった。鶴見和子「生活記録以前—働く婦人の意識調査」、『生活記録運動のなかで』、東京、未来社、1963年、p.7-16を参照。
- (35) 戦前においては、紡績労働者との間に契約書で約定された労働形態があった。そのシステムの下では、会社の仕事仲介人は両親に前金を払っており、娘達はその前金を「払い戻すため」に働かざるを得なかった。
- (36) 戦前の紡績女子工員の状況については、細井和喜蔵『女工哀史』、東京、改造社、1929年、がこの課題について最もすぐれた古典的な研究である。女性の絹糸工業労働者の歴史については、楫西光速ほか『製糸労働者の歴史』、東京、岩波書店、1955年を参照。労働状況や姿勢の変化に関しては、三世代にわたる紡績労働者のインタビュー素材を基にした報告である鶴見和子「女三代の記」、『生活記録運動の中で』、pp.98-129を参照。
- (37) 末川博編著「労働基準法」、『岩波基本六法』、東京、岩波書店、1962年、第10章、第94-96条、p.771。
- (38) 1952年、繊維労働者協会は、繊維工場の寄宿舎制度における真の民主主義は協会の義務である、との声明を出した。嶋津千利世『女子労働者』、pp.170-171。
- (39) 前掲書、pp.174-175。引用されたインタビューは1937年に行われた。この著者は繊維企業の労働組合の声明を引用しており、1950年における彼女の調査と同じ視点が正確に表現されている。
- (40) 労働省婦人少年局編『婦人労働の実情』、p.134。この調査は1961年に行われた。
- (41) 嶋津『女子労働者』、pp.230-231。
- (42) 田中美智子「家の人たち」木下順二・鶴見和子編『母の歴史』、河出書房、1954年、pp.21-22。
- (43) 志賀はるみ「私の家」、前掲書、pp.42-43。
- (44) 石母田正「母についての手紙」、『歴史と民族の発見』、東京大学出版会、1952年、pp.346-370。
- (45) サークルの発展についての詳細は、澤井余志郎「ノロノロと歩んできたなかまたち」、木下・鶴見編『母の歴史』、pp.132-162。

- (46) 鈴木久子「女の問題—母と私の場合—」、前掲書、pp.115-119。
- (47) 澤井余志郎「紡績の娘から百姓娘へ」磯野誠一・木下順二・鶴見和子・日高六郎・丸岡秀子編『仲間のなかの恋愛』、東京、河出書房、1956年、pp.174-180；三宅昭夫、田中美智子「新しい愛情」、木下・鶴見編『母の歴史』、pp.122-130。
- (48) 鶴見和子「主婦と娘の生活記録」、『生活記録運動のなかで』、pp.81-82。
- (49) 前掲書、pp.82-83。
- (50) 磯野ほか編『仲間のなかの恋愛』、pp.56-82。
- (51) 澤井は郷里で見合いをするという理由で数日間の休暇を会社に申し出た。休暇が認められると、家に戻るのではなく、綴方教育に関心を寄せる教員の集会に出席した。会社はこれを約束違反とみなし、澤井を解雇処分にした。それに対して彼は地方裁判所にて会社を訴え、正式に認められた休暇においては行動の自由があるとして異議を申し立てた。勝訴までに3年を要した。澤井は勝訴したものの、会社側は澤井を再び雇用することはなかった。やがて彼は労働組合事務所の職員となった。
- (52) 磯野ほか編『仲間のなかの恋愛』、pp.182-183。
- (53) 前掲書、p.184。
- (54) 伊那での1965年1月3日の会合についてのガリ版記録より。
- (55) 鶴見「女三代の記」、p.126-127。
- (56) 志賀はるみ「母のこと」、木下・鶴見ほか編著、『母の歴史』、p.77。
- (57) ルサンチマンとは、憎しみ、復讐、妬みなどの感情の累積的な抑制から発生する態度を意味する。それらの感情が表に出せるときには、ルサンチマンは発生しない。しかしある人がそれらの感情を呼び起こす人や集団に対して感情を自由に表せず、このような無気力な感情の発生途上において、それらの感情が連続的に再体験させられ、時間がたつと、ルサンチマンが発生する。ルサンチマンは墮落し、当人の価値を下げるだ

けでなく、本質価値をも下げる傾向に導く。Max Scheler、Ressentiment、Glencoe、Ill、The Free Press、1961、p.23。

- (58) 例えば、元兵士で高等学校の教師であった白鳥邦夫によって始められた「山脈の会」と呼ばれた綴方サークルは、そのメンバー間同士のコミュニケーションよりむしろディスコミュニケーションの作用が強調された。雑多な社会的出自や職業の若い男性と女性から成るこのサークルの構造は、紡績女性労働者のサークルのそれとはたいへん異なっている。白鳥邦夫、『無名の日本人』を参照。

◆翻訳に関わった人間学研究所ランチタイムワークショップ参加者有志
(所属は、2008年3月時点のもの。記載のない大学名はすべて京都文教大学。)

●学生・卒業生

鷹野紗代子(文化人類学研究科修士課程1回生)
井上恵梨子(甲南大学大学院人文科学研究科修士課程1回生)

町 泰樹(臨床心理学科卒業生)
友野 響子(文化人類学科卒業生)
栗原 里佳(文化人類学科卒業生)
勝見 章太(文化人類学科4回生)
庄野 周平(文化人類学科4回生)
竹内 愛(文化人類学科3回生)
堀川 陽子(文化人類学科3回生)
清水 香里(文化人類学科3回生)
太田 晶子(臨床心理学科2回生)
吉岡 太朗(文化人類学科2回生)
近藤 大介(文化人類学科1回生)
宮川 恵(臨床心理学科1回生)

●教員

Elizabeth.A.King (文化人類学科教授)
佐藤 知久(文化人類学科専任講師)
西川 祐子(人間学研究所所長)

●編集事務

立石 尚史(人間学研究所事務)